

「環境と産業の調和」から「有明海再生」に向けて

～鹿島市ラムサール条約推進協議会（佐賀県鹿島市）の取り組み～

はじめに

当研究所は、令和2年度に環境省九州事務所および九州地方環境パートナーシップオフィスと連携して5つの地域循環共生圏づくりを支援した。シリーズ第3回の本稿では、鹿島市が運営する「鹿島市ラムサール条約推進協議会」の取り組みについて紹介する。同協議会では、『環境と産業の調和』から『有明海再生』に向けて」を活動テーマとし、多様なステークホルダーと共に、肥前鹿島干潟の保全に向けた活動を行っている。

1 鹿島市の特徴

- 鹿島市には有明海に面した肥前鹿島干潟があり、ラムサール条約湿地として登録されている。
- 鹿島市ラムサール条約推進協議会は、環境省の地域循環共生圏プラットフォーム構築事業に採択され、有明海の保全・再生に向けた活動を行っている。

(1) 鹿島市の概要

鹿島市は、佐賀県の南西部に位置し、市域東部は有明海に面する(図表1)。人口28,394人(2021年4月30日現在)を有する同市は、1954年に旧鹿島町を含む5町村が合併し、誕生した。海苔や温州みかんの生産が盛んであり、伝統工芸品には織物の「鹿島錦(佐賀錦)」がある。

主な観光地には、日本三大稲荷に数えられる「祐徳稲荷神社」があり、年間300万人の参拝者が訪れている。また、古くから酒造りが盛んな地域であり、現在も6つの酒蔵が酒造りを行っている。

図表1 鹿島市の位置



資料：佐賀県

(2) 肥前鹿島干潟とラムサール条約

① 肥前鹿島干潟

肥前鹿島干潟(図表2)は、東アジアにおけるシギ・チドリ類の重要な渡りの中継地、および越冬地になっており、国際的に重要な湿地として、2015年5月にラムサール条約湿地として登録された。

ラムサール条約の正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」であり、1971年にイランのラムサールでの国際会議において採択されたため、一般的に「ラムサール条約」と呼ばれている。同条約は湿地とともに暮らしていく環境づくりを目指す条約であり、湿地の生態系と環境を保全するとともに、環境を守りながら湿地を賢く利用(ワイズユース)していくことを目的としている。

図表2 肥前鹿島干潟



資料：鹿島市

3 地域循環共生圏実現に向けた具体的な取り組み

- 有明海保全のための資金獲得に向けて、循環型の仕組みを確立。
- 清掃活動の競技化や、市内学校への環境教育など、独自性の高い取り組みを実施。
- 自然との共生に向けて、官民協働で課題解決に尽力。

(1) 肥前鹿島干潟基金増額プロジェクト

同協議会の、地域循環共生圏実現に向けた具体的な取り組みの一つに「肥前鹿島干潟基金増額プロジェクト」がある。この取り組みは、有明海保全のための資金を集める目的で行われており、鹿島市が認証した「ラムサールブランド認証品」(図表5)の売上の一部が、基金に寄付される仕組みになっている。家庭から出る生ゴミや、海岸清掃で集めたヨシや草などを堆肥として使用し生産した作物や加工品を認証品とし、さらにそれらを購入した代金の一部が有明海の保全・再生に使用されるという、極めて地域循環に資する取り組みである(図表6)。また、ブランド認証品には、減農薬栽培の「ラムサール米」が含まれており、耕作放棄地を活用し育てられた「SDGs牛」も市内飲食店とメニュー開発中である。購入者も食べて応援することで、同協議会が掲げる「美味しいは、美しいになる」につながる。

図表5 ラムサールブランド認証品(一部)



資料提供：鹿島市

図表6 肥前鹿島干潟の循環の仕組み



資料提供：鹿島市



肥前鹿島干潟ラムサール米



SDGs牛

図表7 スポGOMI

(2) 地域に根差した活動

2020年11月、ゴミ拾いをスポーツとして競技形式で行う「スポGOMI」を開催(図表7)。参加者は予定人数を大幅に上回り、清掃活動と参加者の運動・健康の両立に寄与した。

また、市内全小学校での環境教育プログラムや、県立鹿島高校でのビジネスアイデア発表会にも参加し、共生圏実現に向けて動いている。



資料提供：鹿島市

(3)自然との共生

①ディスプレイ事業

鹿島市内の協力事業所にディスプレイ（生ゴミ粉碎機）を導入。農家から提供される廃棄用農作物（玉ねぎ、みかん、アスパラガス）を用いて、ディスプレイ実証実験を行った。廃棄用農作物は、堆肥として活用できることが確認されており、食品ロス削減にも貢献。今後、この堆肥を使用して生産した作物を、ラムサールブランド認証品に組み入れていく。

②カモによる海苔の食害への対応

鹿島市に飛来するカモの中には、海苔や小麦を好むカモ（ヒドリガモなど）が生息している。特に海苔の食害（図表8）は深刻であるため、協議会や鹿島市は、カモを安全な餌場に誘導する方法を模索してきた。

今般、当プラットフォーム構築事業の中で、カモ誘導の実証実験をビジネスマッチングサイトで公募したところ、LED投光器でムクドリ対策の実験を成功させたパイフオニクス株式会社（静岡県浜松市）とのマッチングが成立。

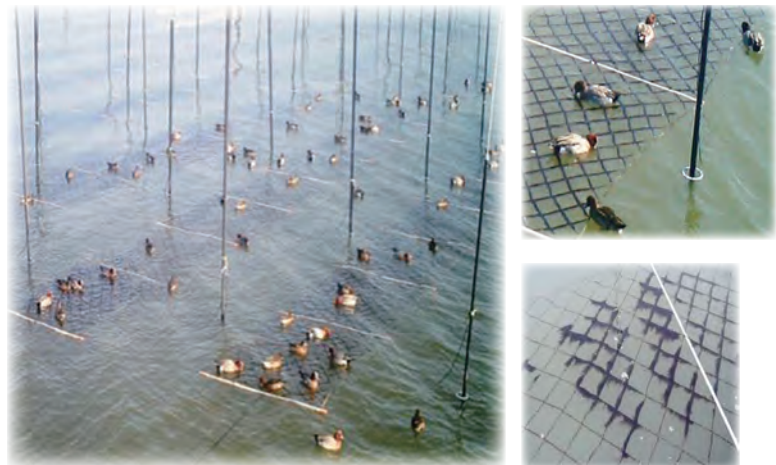
2021年1月に行った実証実験では、カルガモにLEDライトを照射したところ、照射後1～2秒後にカモが一斉に飛び立ち、実験は成功した（図表9）。2021年度も実験を継続する予定であり、GPSを付けたカモの行動調査も検討している。また、食害に遭っている海苔の一部を、ブランド海苔として商品化する計画もあり、ブランド認証品への組み入れによる基金増額にも貢献できる。

さらに、使用したLED投光器をイルミネーションとして有効活用すべく、実験当日の夜間に、干潟沿いの石畳へのライトアップを試行した（図表10）。ナイトツーリズムとしての観光スポット化が期待される。また、カモの食害は夜間にも確認されていることから、投光器の色を使い分けることで、食害対策とライトアップの両立も可能となる。

おわりに

鹿島市ラムサール条約推進協議会は、『有明海環境保全を通じたローカルSDGs』の推進に尽力しており、地域資源を活かした独自性の高い取り組みを行っている。地域循環共生圏実現に向けて、取り組みの継続と域内外への発信が期待される。

図表8 カモによる海苔の食害



資料提供：鹿島市

図表9 ライト照射後に飛び立つカルガモ



資料提供：鹿島市

図表10 ライトアップの様子



資料提供：鹿島市